

学 位 論 文 要 旨

氏 名 兼平 佳枝

題 目 音楽科授業における比喩的表現による意味共有に関する教育実践学的研究

子どもの思考力の育成は、我が国の教育の中心的な喫緊の課題となっている。思考力に不可欠なものが、問題解決能力としてのコミュニケーション能力である。筆者は、このような能力の育成には、学習活動の中にコミュニケーション能力を発揮するような状況をつくり、子どもがコミュニケーション活動を積み重ねていくことが肝要なのではないかと考えた。そのため、意味を共同的関係によって共有する社会的構成主義の立場で、音楽科授業実践を積み重ねてきた。そこでは、「○○みたい」のような比喩的表現で表された意味が協同的、主体的に共有されていく姿が見られた。ここに、問題解決能力育成としてのコミュニケーション能力を発揮させる鍵があるのではないかと考えた。しかしながら、音楽科教育における比喩的表現と意味共有との関係についての先行研究は見当たらなかった。

そこで本研究では、J. デューイのコミュニケーション論を基に、音楽科授業における比喩的表現による意味共有の論理を教育実践学的な研究方法によって明らかにし、その教育的意義について考察することを目的とした。本研究における比喩的表現とは、ある対象を別のものにとえて表す言語表現（擬音語や擬態語をも含む）のことを指す。音楽科授業では認識の対象が質となるが、質は言葉で言い表すことはできないため、「○○みたい」という比喩的表現が使われやすい。このことから、意味の根源を質におき、意味共有をその本質とする J. デューイのコミュニケーション論に手がかりを求めた。研究の方法としては、第 I 部ではデューイにおけるコミュニケーション論を基に、音楽科授業における比喩的表現による意味共有に関する基礎理論を導出した。第 II 部では第 I 部で導出した理論的枠組みに基づいて実践研究を行った。終章では、第 I 部、第 II 部を総括し、比喩的表現による意味共有の論理を構築した。

第 I 部では、デューイにおけるコミュニケーション論を基に、音楽科授業における比喩的表現による意味共有に関する基礎理論を導出した。第 1 章で、デューイにおける意味共有、および教育における比喩的表現についての関連研究を調べ、これまでの意味共有や比喩的表現の解釈を整理した。第 2 章では、デューイにおける意味共有に関する文献研究を行った。意味共有とは、共通の目的をもつ人々が協力して環境との相互作用に参加し、行為の完成を予想して協同活動を行うというコミュニケーションによって、複数の人々が他者と共通の意味を所有することであった。

ここでの意味とは、人間と環境との相互作用によって生じた状況の「質の感じ」（例：何かホワーンとした感じ）が識別された「感覚的意味」（例：幻想的な感じ）と、識別に働く「意味内容」（例：音の進み方が変わっている）が記号化された「表示的意味」（例：音が全音階で進んでいる）の二重の機能を備えたものであった。

第 3 章では、まず比喩的表現についての文献研究を行い、比喩的表現は〈趣意：○○みたいと

たとえばもの（例：幻想的な感じ）〈媒体：たとえられる言語（例：水面を滑る帆船の夢のようだ）〉〈根拠：たとえの根拠（例：何かホワーッとした感じ）〉の関係で理解されることを把握した。そして、それら3つの要素と意味共有との関係を明らかにした。第4章で、第1～3章までの理論を総合的に考察し、第Ⅱ部の実践分析に向けての理論的枠組みを導出した。それは以下の3点である。①比喩的表現は〈趣意〉〈媒体〉〈根拠〉の関係から成る。②意味共有は「質の感じ」を源とし「感覚的意味」「表示的意味」の二重機能をもつ。③意味共有を成立させるのは、共通の目的をもって協同活動する場でのコミュニケーションである。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で導出した理論的枠組みから(1)比喩的表現、(2)意味共有、(3)コミュニケーション、という3つの分析視点を設定し、筆者による小学校高学年および中学校音楽科授業における鑑賞授業4事例と創作授業1事例の計5事例の実践分析を行い、実践の場における比喩的表現による意味共有の実現状況を明らかにした。分析結果として、つぎの①～③を得た。①比喩的表現に関しては、〈根拠〉となる「質の感じ」が共通項となって〈趣意〉と〈媒体〉を結ぶという関係があった。②意味共有に関しては、「〈趣意〉は何か」を探る問題解決過程として展開されていた。具体的には、「〈趣意〉は何か」を探して音楽を聴くことで、「〇〇みたい」と比喩的表現に結び付けられる部分が特定され、その部分の音楽の諸要素である「形式的側面」に注意が向けられる。それによって、その部分の「意味内容」と「表示的意味」が共有され、質の感じが識別されて音楽の諸要素の働きによって感じられる「内容的側面」に当たる感覚的意味となる。つまり対象とする音楽の「形式的側面」と「内容的側面」が結合したものとして意味が共有されたといえる。③コミュニケーションに関しては、共感的で協同的な問題解決が実現されていた。

終章では、第Ⅰ部、第Ⅱ部の総括を行い、第Ⅱ部の分析結果を構造・過程・特質の観点から捉え直し、音楽科授業における比喩的表現による意味共有の論理を以下のように導いた。

1. 比喩的表現による意味共有では、音楽の「内容的側面」と「形式的側面」が関連付けられ、「感覚的意味」と「意味内容」・「表示的意味」を備えたものとしての音楽の意味が共有される。
2. 比喩的表現による意味共有は協同的な問題解決の過程となる。
3. 比喩的表現による意味共有のコミュニケーションは、共感的な点に特質をもつ。

比喩的表現の〈根拠〉である質の感じ、〈趣意〉である「内容的側面」となる感覚的意味、「形式的側面」となる「意味内容」・「表示的意味」、〈媒体〉である言葉、擬態語・擬音語によって、質の世界の認識における意味の二重機能について子どもの学習として成り立つように論理化した。ここに教育実践学としての独自性がある。

そして上記の結論について、①「質の感じ」の機能と感性の育成、②芸術教科としての音楽科授業の意味共有の特性、③共感と問題解決のかかわり、④思考力の育成、の4点から考察し、音楽科教育実践への示唆と展望について述べた。「質の感じ」は自己・音楽・他者の三者を結び付ける際に機能するものであった。感覚でしかとらえられない「質の感じ」を働かせることは、感性の育成はもちろん、思考力の育成につながるものであるといえる。教師がこのような比喩的表現の機能を発揮させることで、子どもが「質の感じ」を根拠にさまざまな情報を関連付ける問題解決能力としての思考力を発揮する授業の実現が可能となる。今後の課題は、比喩的表現の機能について科学的経験を中心とした他教科と比較することである。

